

日本書道史

第7講 「散らし書き・料紙の美」

住川 英明 (岐阜女子大学)

第7講 「散らし書き・料紙の美」

【学習到達目標】

- 平安時代中期から後期にかけての、女手による「古筆」の技法について、具体的な例を挙げて説明することができる。
- 料紙作成の技法と代表的な装丁形式について、具体的な例を挙げて説明することができる。

第7講 「散らし書き・料紙の美」

1. 紙背仮名消息と散らし書き

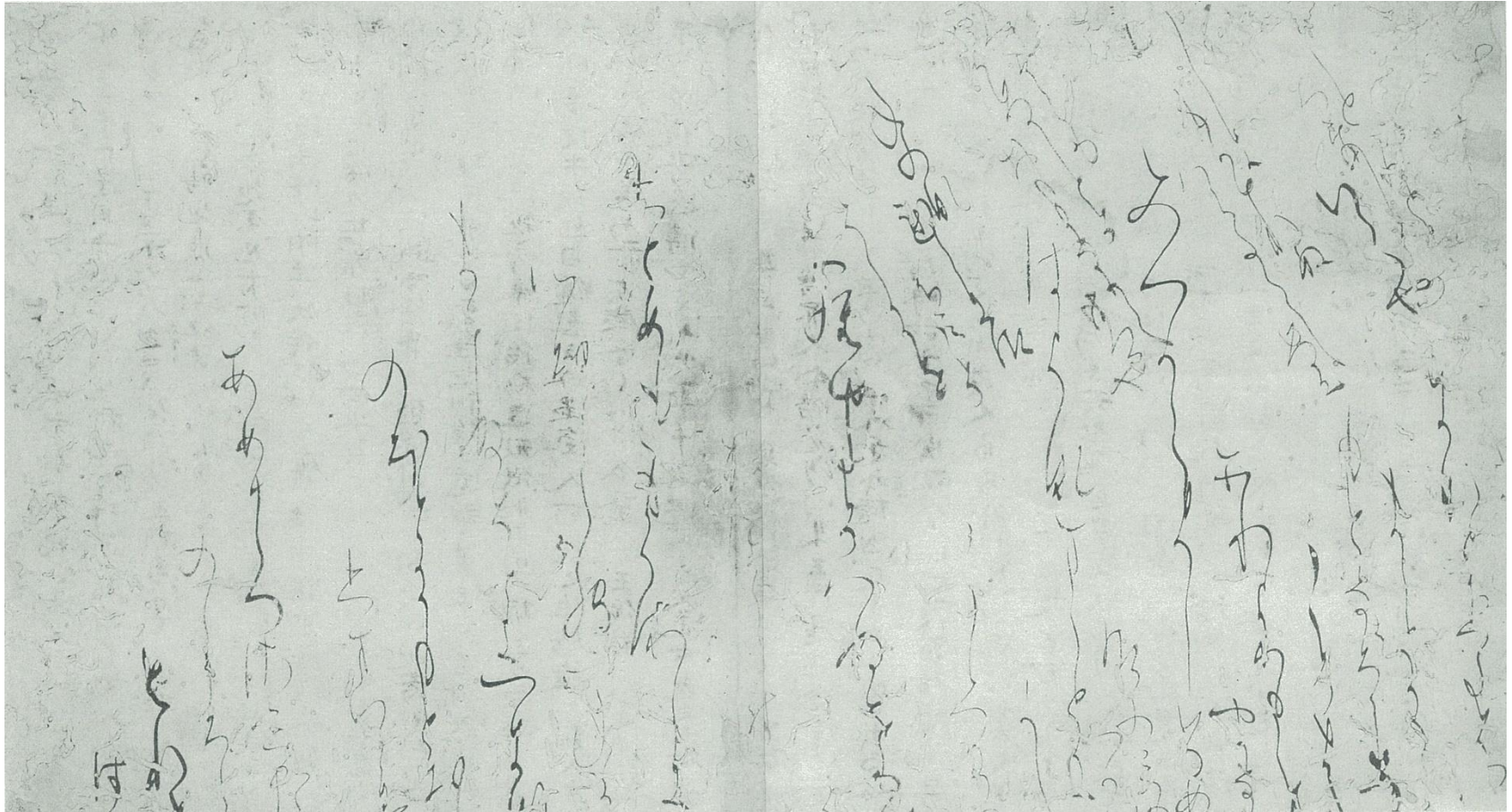
- 古筆とは多くの場合、平安時代の貴族文化の系統を引く「仮名書」で書かれた筆跡を指す.
- 調度品や美術品として特別に制作されたものである場合が多い.
- その多くが、元来卷子本や冊子本であったものが裁断され、いわゆる「切」として伝来する.

第7講 「散らし書き・料紙の美」

1. 紙背仮名消息と散らし書き

- 「散らし書き」とは、「行の長さ、行の高さ、行間の幅をいろいろに変化させて書く書き方」（春名好重）のことである。
- 散らし書きの技法は、手紙などの「用」の世界で育まれ、調度品という「美」の世界で展開されたものと考えられる。

第7講 「散らし書き・料紙の美」



《三宝感応要録紙背仮名消息》

第7講 「散らし書き・料紙の美」

2. 散らし書きの技法と三色紙

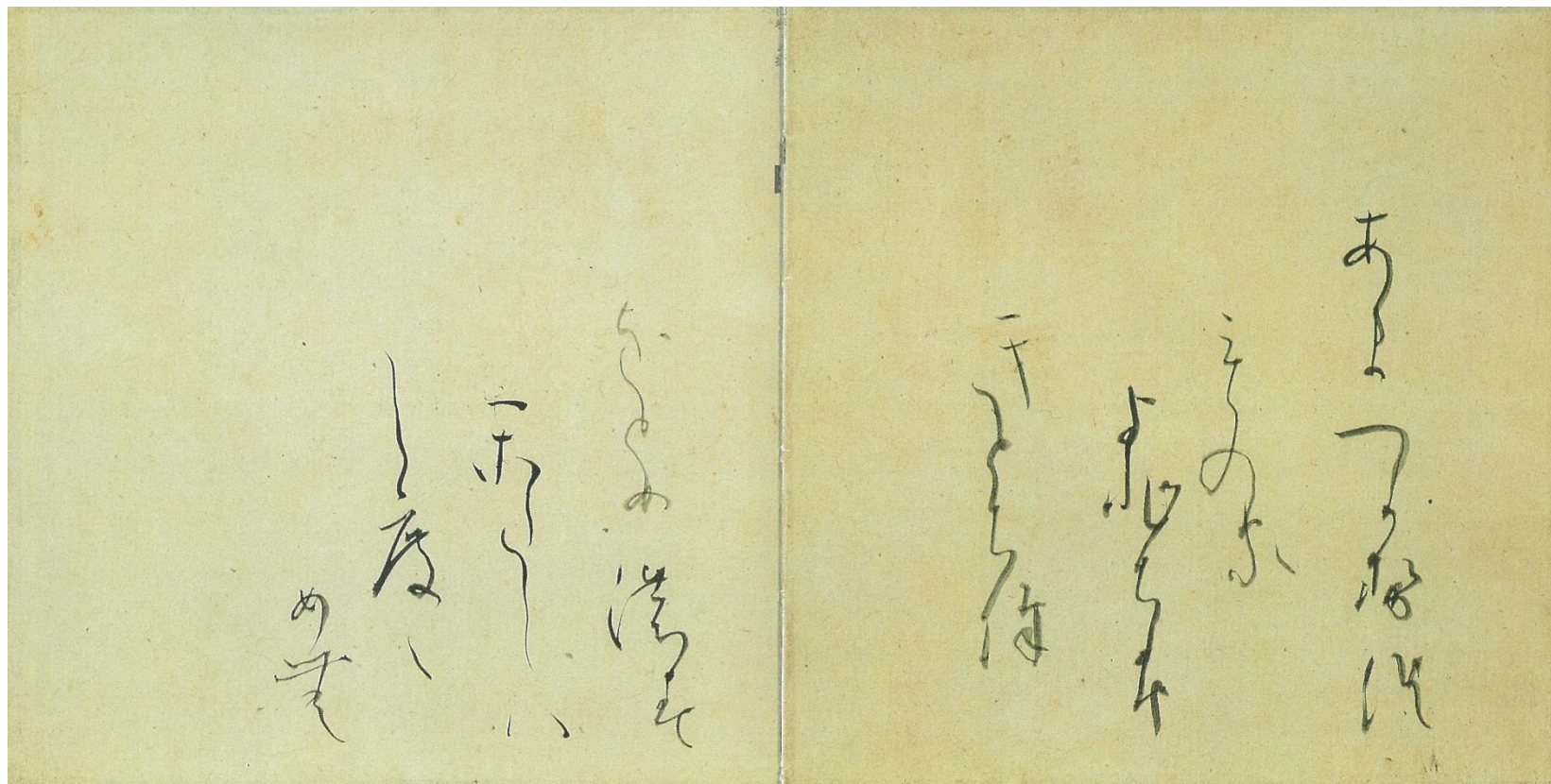
- 11世紀中頃になると、行書きが行われる一方で、文字の配列にさまざまな工夫を凝らした「散らし書き」が行われるようになった。
- 散らし書きの技法が高度に発揮された古筆が、いわゆる「三色紙」として名高い《継色紙》・《寸松庵色紙》・《升色紙》である。

第7講 「散らし書き・料紙の美」

2. 散らし書きの技法と三色紙

- 《継色紙》は、本来は内面書写による粘葉装の冊子本であり、多くは見開き2頁に散らし書きされ、返し書きや渡り書きの手法も見られる。ことに行の傾きとその間合いから生まれる多様な展開、文字群同士や文字群と余白との響き合いは、他に例を見ないものである。

第7講 「散らし書き・料紙の美」



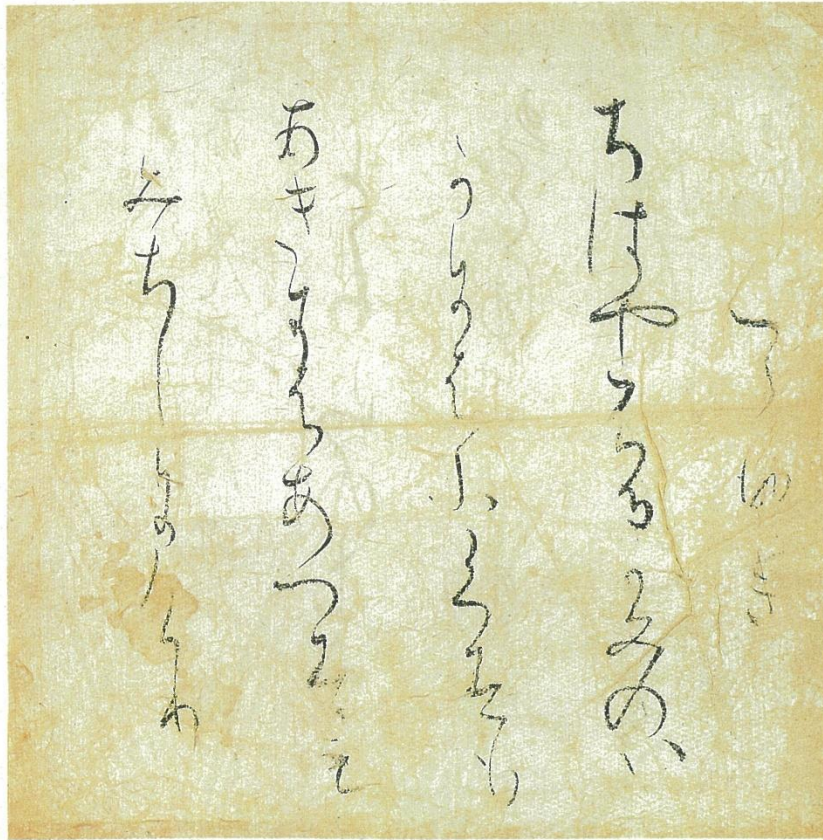
《継色紙》

第7講 「散らし書き・料紙の美」

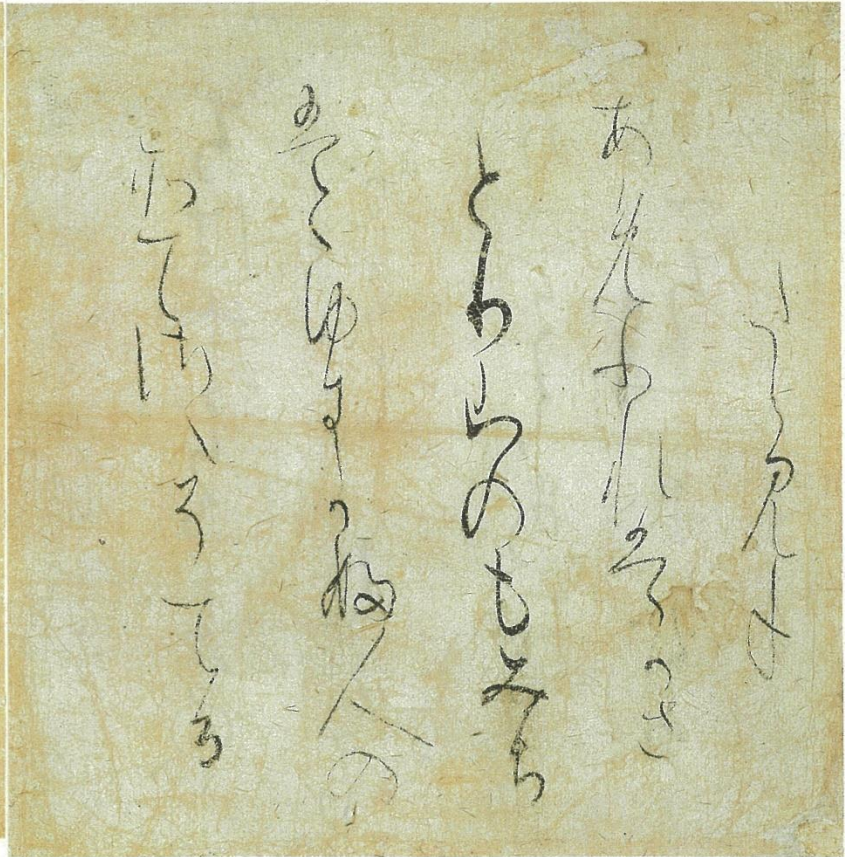
2. 散らし書きの技法と三色紙

- 《寸松庵色紙》は，《継色紙》同様，当初内面書写による粘葉装の冊子本であったが，分断されて1枚1首の升形として諸家に伝えられている。ゆったりとして力強い書線，上下に貫通する連綿，行と行との関わりの濃密さなどが魅力である。素朴と巧緻との調和のとれた姿を見せる。

第7講 「散らし書き・料紙の美」



藤田美術館蔵



個人蔵

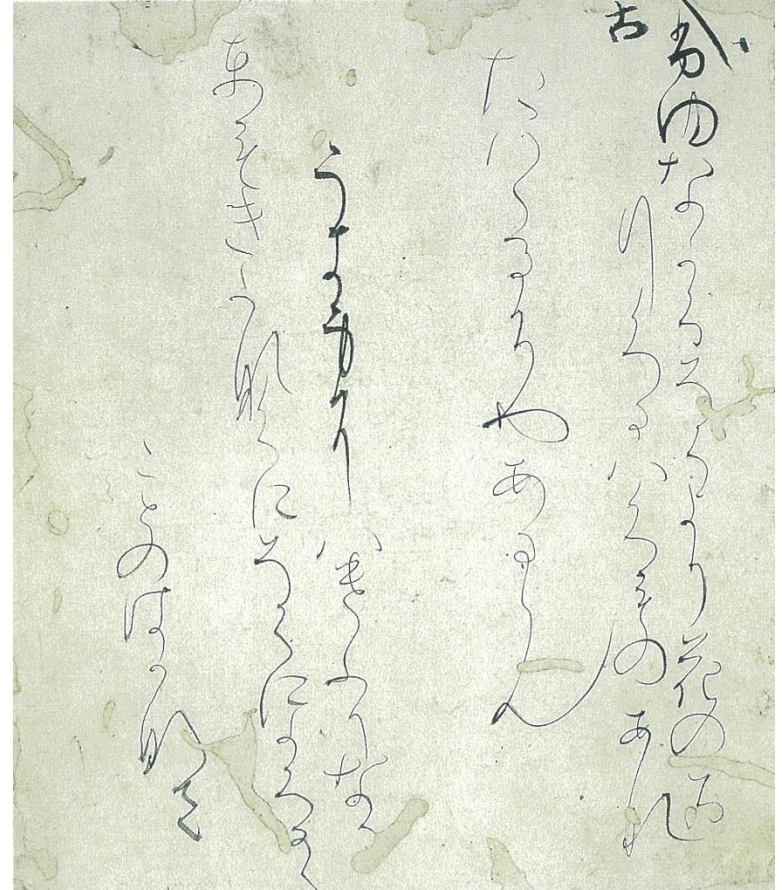
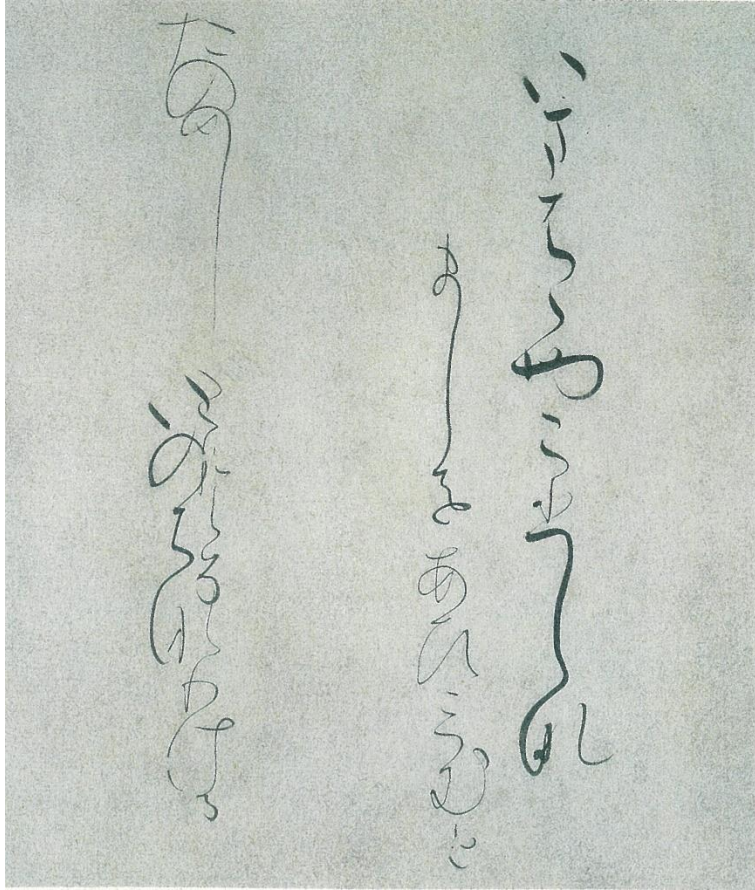
《寸松庵色紙》

第7講 「散らし書き・料紙の美」

2. 散らし書きの技法と三色紙

- 《升色紙》は、やはり当初綴葉装の冊子本であったものが分断されて現在の姿となった。明るさ・華やかさが印象的な古筆である。線の太細や行の組み合わせが意図的であり、変化に富んでいる。

第7講 「散らし書き・料紙の美」



《升色紙》

第7講 「散らし書き・料紙の美」

3. 料紙と装丁形式

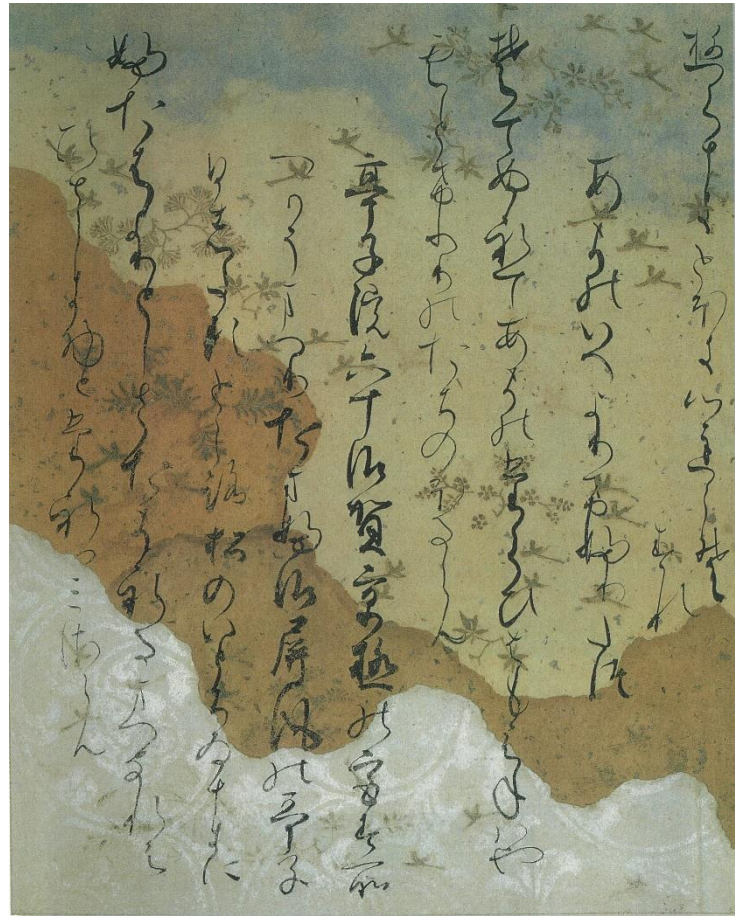
- 加工された紙のことを「料紙」と呼んで、加工されていない「素紙」と区別している。
- 装飾料紙には、大きく分けて2つの系統がある。1つは「染紙」、もう1つは「唐紙」である。
- 平安後期になると、華麗な装飾料紙が作られるようになる。書き手には、料紙の華麗さに負けない、筆跡の強さと表現の工夫とが求められた。

第7講 「散らし書き・料紙の美」

3. 料紙と装丁形式

- 冊子本には、糊で貼り重ねた「粘葉装」、幾枚かの紙を重ねて2つ折りにして綴った「綴葉装」などがある。
- 断簡として切り離され、新たな装丁を施されたときに、原件の寸法などが変化していることが多いので、注意が必要である。

第7講 「散らし書き・料紙の美」



《本願寺本三十六人歌集（石山切）》

第7講 「散らし書き・料紙の美」



《元永本古今集》

課題

1. 散らし書きの技法の発生と展開について、紙背仮名消息と三色紙を例として、考察しなさい。

第7講 「散らし書き・料紙の美」

【学習到達目標】

- 平安時代中期から後期にかけての、女手による「古筆」の技法について、具体的な例を挙げて説明することができる。
- 料紙作成の技法と代表的な装丁形式について、具体的な例を挙げて説明することができる。

日本書道史

第7講 「散らし書き・料紙の美」

住川 英明 (岐阜女子大学)